

石薬師東古墳群・石薬師東遺跡
(第11次・第12次) 発掘調査報告

2000.3

三重県埋蔵文化財センター

序

平成7年の阪神・淡路大震災では、6,300人を越す貴い命が失われました。被災地の復興は徐々に進んでおりますが、未だ元の姿に戻ったとはいえません。平成11年には、トルコ・ギリシャ・台湾等世界各地で大地震が相次ぎ、防災体制充実の必要性が改めて認識されます。このような災害を教訓に、三重県でも防災体制の見直しを行ってまいりました。そこでこうした大規模災害時に使用する、ヘリポートや倉庫といった施設の整備が急務となっております。

しかし、こうした施設建設のために、地下に眠る埋蔵文化財は破壊されてしまいます。今回防災施設が建設される場所には、石薬師東古墳群・石薬師東遺跡という、県内でも有数の遺跡が存在しております。特に石薬師東古墳群は近年の発掘調査で出土した馬形埴輪が、文化庁主催の新発見考古速報展「発掘された日本列島'98」展に出展され、一躍有名になりました。

今回、ここに第11次・第12次発掘調査の成果を報告いたしますが、新たに方墳3基を発見し、遺跡がさらに西へと広がることを確認いたしました。先年行われた発掘調査の成果と合わせ、当地域の歴史を考える上で貴重な資料を得ることができました。本書が地域の歴史研究の一助となるとともに、文化財保護の啓発のお役に立てれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に際しましてご協力を賜りました石薬師町の皆様をはじめ地元の方々、及び三重県地域振興部消防防災課、三重県消防学校、(財)三重県農業開発公社、鈴鹿市教育委員会、鈴鹿市考古博物館などの関係各位に厚く感謝を申し上げます。

平成12年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 大井 與 生

例 言

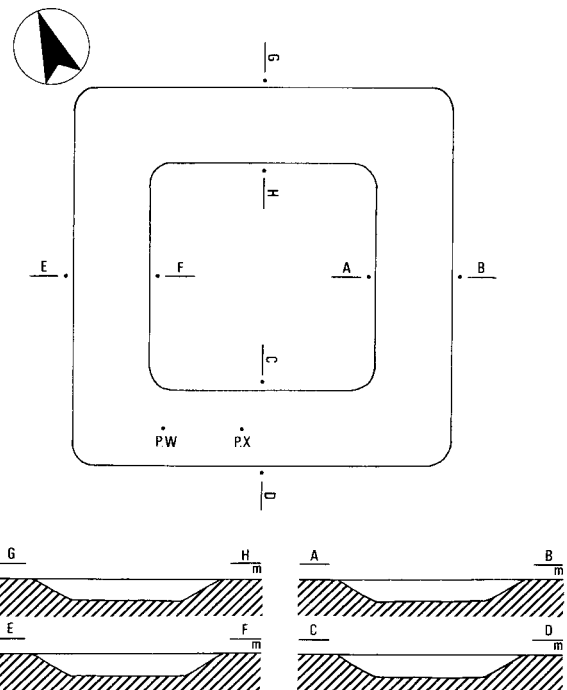
- 1 本書は、三重県鈴鹿市石薬師町字寺東に所在する石薬師東古墳群および石薬師東遺跡（第11・12次）の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、三重県教育委員会が三重県地域振興部より執行委任を受けて、平成10年度・平成11年度三重県防災拠点施設整備事業に伴って実施したものである。
- 3 調査は、下記の体制で行った。
調査主体 三重県教育委員会
調査担当 三重県埋蔵文化財センター
平成10年度（第11次） 調査第一課 主査兼係長 野原宏司
主 事 船越重伸
平成11年度（第12次） 調査第一課 技 師 角正（杉崎）淳子、水谷 豊
資料普及グループ 研 修 員 山口聡司、打田久美子
- 4 調査にあたっては、三重県地域振興部消防防災課・三重県消防学校・（財）三重県農業開発公社・鈴鹿市教育委員会・鈴鹿市考古博物館および地元の方々の協力を得た。また、旧帝国陸軍については伊藤厚史氏（名古屋市見晴台考古資料館）・服部文孝氏（瀬戸市歴史民俗資料館）にご教示いただいた。
- 5 当報告書の作成は、調査第一課および資料普及グループが行った。遺構・遺物の写真撮影は角正・水谷が行い、執筆及び全体の編集は角正が行った。

- 6 本書で示す方位は、国土調査法第VI座標系を基準とし、座標北を用いた。真北は $N 0^{\circ} 18' W$ 、磁北は $N 6^{\circ} 40' W$ 、それぞれ座標北から振れている。（平成6年）

- 7 本書で報告した記録及び出土遺物は全て三重県埋蔵文化財センターで保管している。

- 8 古墳の平面図・土層断面図については、過去の調査報告との比較を容易にするため、概ね左記の図版凡例に縮尺を統一した。

（遺構平面図は1/100、土層断面図は1/40）



- 9 スキャニングによるデータ取り込みのため若干のひずみが生じています。各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

目次

I 前言	1
II 位置と環境	3
III 調査の成果	4
1 概要	
2 第11次調査	
3 第12次調査	
IV 結語	11

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	3
第2図 調査区位置図	4
第3図 第11次調査トレンチ配置図	5
第4図 ヘリポート部分トレンチ平面略則図	5
第5図 第12次調査区北壁・西壁土層断面図	6
第6図 第12次調査区遺構平面図	7
第7図 85号墳・86号墳平面図及び土層断面図	8
第8図 87号墳平面図及び土層断面図	9
第9図 87号墳東溝遺物出土状況図	10
第10図 出土遺物実測図	12
第11図 石薬師東古墳群古墳配置図	14

表 目 次

第1表 調査名称一覧	2
第2表 古墳一覧表	13
第3表 出土遺物観察表	13

図 版 目 次

図版1 第11次調査前風景／T6周溝／T8周溝／T7周溝／T8全景／T7南側	15
図版2 第12次調査区全景／85号墳	16
図版3 86号墳／87号墳	17
図版4 87号墳東溝遺物出土状況／87号墳東溝磨製石斧出土状況／ 87号墳西溝遺物出土状況／作業風景／旧帝国陸軍排水溝	18
図版5 出土遺物	19

I 前 言

1 調査の契機

平成7年に起こった阪神淡路大震災では、6,300人を越す多数の死者が出た。これは、地震による建物の倒壊だけでなく、火災・ライフラインの断絶など2次災害による被害も大きかったことは、記憶に新しい。三重県でも、これを教訓に東海地震等の被害を想定し、防災体制の見直しを行ってきた。そこで、このような大規模災害時に使用するヘリポート、倉庫等の防災施設の早急な整備が必要とされた。

さて、平成9年度に三重県教育委員会文化芸術課が行った事業照会に対し、三重県地域振興部消防防災課から、鈴鹿市石薬師町内の三重県防災拠点施設整備事業計画の回答があった。この事業予定地内は、石薬師東古墳群（市番号754～778）および石薬師東遺跡（市番号727）の北西隣接地に当たる。当遺跡は、平成5年度に三重県総務部消防防災課（当時）から、三重県消防学校施設・設備整備事業計画の回答を受け、平成5年度に鈴鹿市教育委員会、平成6年度に三重県埋蔵文化財センターが範囲確認調査を実施した。その結果、平成5年度～8年度にわたって当埋蔵文化財センターにより発掘調査が実施され、46基の古墳や、奈良時代の竪穴住居、掘立柱建物などが発見された。また、鈴鹿市教育委員会による民間開発等に伴う発掘調査でも古墳が13基発見されている。

これらの結果をふまえ、平成10年度に当該事業予定地内の範囲確認調査を再度実施したところ、備蓄倉庫部分720㎡、ヘリポート部分500㎡について、調査が必要であると判断した。そこで、その取り扱いについて保護に努めるよう、三重県地域振興部消防防災課・三重県消防学校と三重県教育委員会生涯学習課・三重県埋蔵文化財センターで協議を重ねた結果、ヘリポート部分については現状保存できると判断した。しかし、備蓄倉庫部分については現状保存が困難であるとして、やむなく発掘調査を実施し、記録保存を図ることとなった。

2 調査の経過

(1) 調査経過および調査日記（抄）

第11次調査は、2,100㎡を対象として平成11年1月25日～29日に、268.5㎡の範囲確認調査を行った。第12次調査は、平成11年4月～6月にかけて720㎡の調査を行った。第12次調査については土工部門を（財）三重県農業開発公社に委託した。第11次調査は寒風の中での調査、第12次調査の前半は日照りが続き、検出作業がはかどらず、後半には雨により、調査区が2度も水没するなど、作業に携わっていただいた方には、大変な苦勞をおかけした。それでも無事に調査を終えることができたのは、作業に従事していただいた方々のおかげである。ここにご芳名を記し感謝する。（五十音順敬称略）

伊藤和代、伊藤玉子、勝野春男、川北昭二、
黒田まさ子、桑原うた子、坂本やゑの、清水はる、
田中重治、田中八重子、生川五十男、堀之内一哉、
松村幸雄

<第12次調査>

4月8日 現地協議。
4月13日 座標・水準点の移動。
第11次調査区の座標測定。
4月22日 重機による表土はぎ開始。
5月10日 人力掘削開始。（雨が降らず、検出にてこずる。）
5月14日 86号墳の周溝を確認。
5月24日 大雨により調査区が水没。
5月26日 87号墳の周溝を確認。
ヘリポート部分地質調査。
5月27日 大雨により再び調査区が水没。
6月1日 消防車による放水。
6月2日 87号墳東側周溝より土師器高杯出土。
6月10日 調査区全景写真撮影。
6月14日 調査区平面図作成。
～18日

(2) 文化財保護法等にかかる諸通知
文化財保護法（以下、「法」）等にかかる諸通知は、

以下により文化庁長官等あてに行っている。

- ・法第57条の3第1項（文化庁長官あて）
平成11年4月1日付消第147号
- ・法第98条の2第1項（文化庁長官あて）
平成11年5月6日付教生第205号
- ・遺失物法にかかる文化財発見認定通知（鈴鹿警察署長あて）
平成11年7月9日付教生第4-16号

3 調査の方法

(1) 調査の名称について

当遺跡は、平成5年度より鈴鹿市教育委員会及び当埋蔵文化財センターによって、複数回調査が行われている。同一年度に調査主体を変えて調査が行われていることもあり、今回改めて整理を行った。下記の通り、今回の範囲確認調査は第11次、本調査は第12次の調査となる。（第1表参照）。

(2) 地区設定について

今回の調査では、調査区が過去の調査区から離れ

ていることから過去の調査の地区設定を踏襲せず、独自に地区を設定した。調査区内を4m四方の柵目で区切って小地区を設定し、南北方向に数字を、東西方向にアルファベットを付け、柵目の北西隅の交点をその小地区の符号とした。なお、この地区設定は国土座標軸とは無関係である。

(3) 遺構番号について

古墳については、周知の古墳25基は、軍事施設の建設等により墳丘が削平を受け、番号が確定できない。そこで第1次調査で発見した古墳から26号墳とし、順次命名している。前述したように、鈴鹿市教育委員会と当埋蔵文化財センター別々に調査を行っているが、番号は通して称号している。今回の調査は85号墳から命名した。

(4) 遺構図面について

調査区の遺構平面図は1/20で作成している。また遺物の出土状況などは個別に1/10の実測図を作成し、古墳の等高線図については1/50で作成した。

	調査主体	調査年月日	調査原因	参考文献
第1次	三重県教育委員会	平成5年11月8日～同年12月24日	消防学校建設	①・⑦
第2次	三重県教育委員会	平成6年4月18日～同年6月24日	消防学校建設	②・⑦
第3次	三重県教育委員会	平成6年11月7日～7年1月30日	消防学校建設	②・⑦
第4次	三重県教育委員会	平成7年4月10日～同年9月1日	消防学校建設	③・⑦
第5次	三重県教育委員会	平成8年4月4日～同年12月20日	消防学校建設	④・⑦
第6次	鈴鹿市遺跡調査会	平成7年10月16日～同年11月2日	道路改良	⑤
第7次	鈴鹿市遺跡調査会	平成8年4月10日～同年4月18日	個人住宅建設	⑥
第8次	鈴鹿市教育委員会	平成8年12月11日	農業用倉庫建設	⑥
第9次	鈴鹿市教育委員会	平成10年6月29日～同年7月1日	道路拡幅	
第10次	鈴鹿市教育委員会	平成11年4月21日～同年5月7日	福祉施設建設	
第11次	三重県教育委員会	平成11年1月25日～同年1月29日	防災拠点施設建設	今回報告
第12次	三重県教育委員会	平成11年4月19日～同年6月30日	防災拠点施設建設	今回報告

なお、それぞれ過去の調査の詳細は下記の文献を参照されたい。

- ①『三重県埋蔵文化財センター年報5』三重県埋蔵文化財センター、1994
- ②『三重県埋蔵文化財センター年報6』三重県埋蔵文化財センター、1995
- ③服部芳人ほか『石薬師東古墳群・石薬師東遺跡（第4次）発掘調査概報』三重県埋蔵文化財センター、1996
- ④服部芳人ほか『石薬師東古墳群・石薬師東遺跡（第5次）発掘調査概報』三重県埋蔵文化財センター、1997
- ⑤『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』鈴鹿市教育委員会、1996
- ⑥『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報Ⅳ』鈴鹿市教育委員会、1997
- ⑦服部芳人・船越重伸ほか『石薬師東古墳群・石薬師東遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター、2000

第1表 調査名称一覧

Ⅱ 位置と環境

石薬師東古墳群および石薬師東遺跡(1)は、三重県鈴鹿市石薬師町字寺東に所在する。鈴鹿市は三重県の中央部よりやや北寄りに位置し、西は鈴鹿山脈、東は伊勢湾を臨む。市のほぼ中央部を流れる鈴鹿川は、鈴鹿山系に源を発し、安楽川などの支流と合流しながら、伊勢湾へと注ぎこんでいる。鈴鹿川の左岸一帯は扇状地が多く、下流の右岸は広大な沖積平野が展開している。当遺跡は、この鈴鹿川下流左岸の中位段丘上に位置している。

当遺跡は平成5年度から当埋蔵文化財センターや鈴鹿市教育委員会によって継続的に発掘調査が行われ、50基以上の古墳や奈良時代の掘立柱建物等が発見されている。第二次大戦中に軍事施設が築かれたために、古墳の墳丘部は削平を受けているが、検出した周溝から主として方墳から成る古墳群であることが分かってきた。周溝からは、筒形器台・子持礎など特殊な須恵器や家形・人物・動物など数多くの形象埴輪が出土した。特に63号墳から出土した馬形

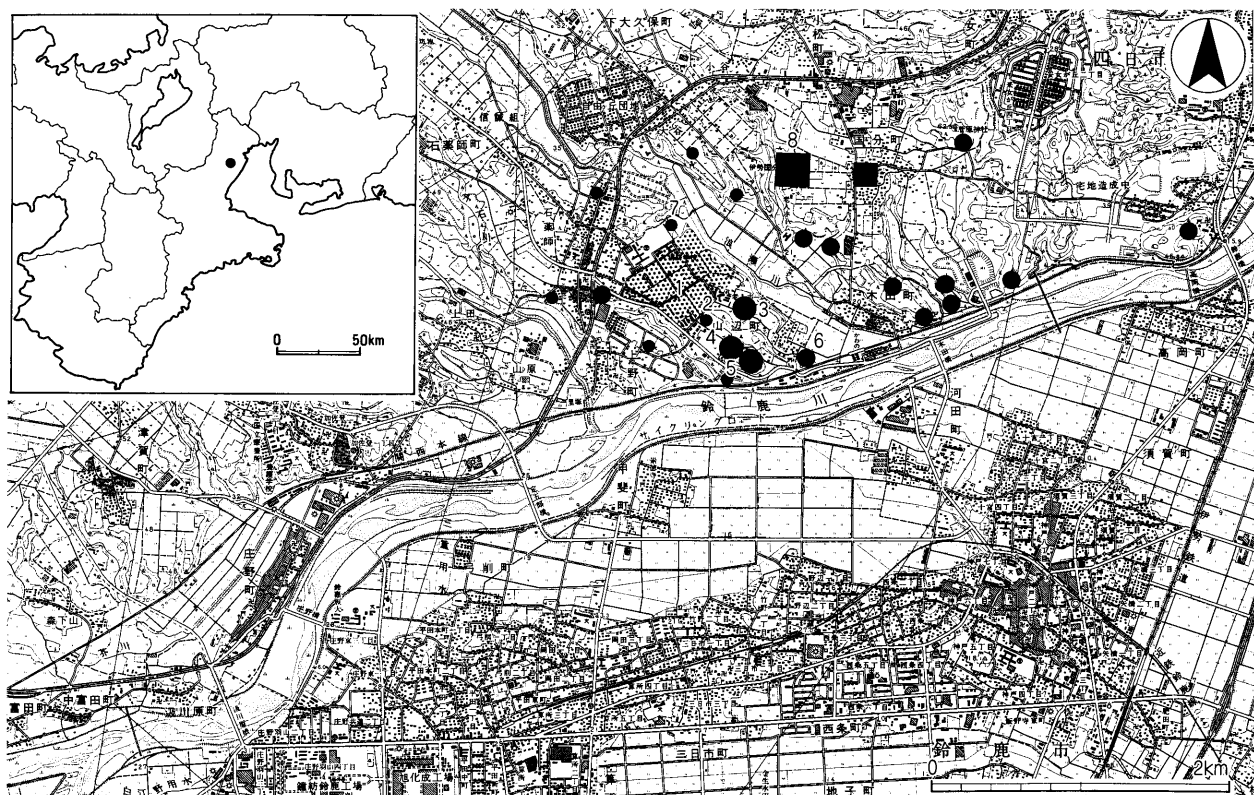
埴輪は、頭部のたてがみ部分の表現が珍しい飾り馬として全国的にも注目される。今回の調査区は今までの調査区の中で最も西に位置している。

当遺跡が位置する鈴鹿川下流域は、県内でも有数の古墳の密集地域である。丸山古墳群(2)・中山古墳群(3)・南山古墳群(4)・口山古墳群(5)・山辺古墳群(6)など、10m前後からなる古墳群と、それらの盟主墳と考えられる丸山1号墳(2)や乗鞍山古墳(7)など全長40mを越える前方後円墳が存在する。また伊勢国府・伊勢国分寺(8)が築かれるなど古代にいたっても、伊勢国の中心地であったことがうかがえる。

本来ならば時代をおって述べるべきであるが、詳細は平成8・9年度の発掘調査概報や発掘調査報告を参照されたい。

[参考文献]

- ・服部芳人ほか『石薬師東古墳群・石薬師東遺跡(第4次)発掘調査概報』三重県埋蔵文化財センター、1996
- ・服部芳人ほか『石薬師東古墳群・石薬師東遺跡(第5次)発掘調査概報』三重県埋蔵文化財センター、1997
- ・服部芳人・船越重伸ほか『石薬師東古墳群・石薬師東遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター、2000
- ・『鈴鹿市史』第1巻、鈴鹿市教育委員会、1980



第1図 遺跡位置図 (S=1:50,000) [国土地理院「鈴鹿」1:25,000より]

Ⅲ 調査の成果

1 概要

平成10年・11年度の2年にわたり、範囲確認調査（第11次）として268.5㎡、本調査（第12次）として720㎡の調査を行った。その結果、第11次調査では周溝と考えられる溝を3条、第12次調査では古墳3基、旧帝国陸軍第1気象連隊の建物跡・排水溝跡・待避壕跡等を検出した。

古墳はいずれも旧帝国陸軍施設及びその後の各種施設によって削平を受け、主体部等は一切検出できなかった。第11次調査では調査範囲が狭いため、墳形は不明であるが、第12次調査で検出した古墳はいずれも方墳である。

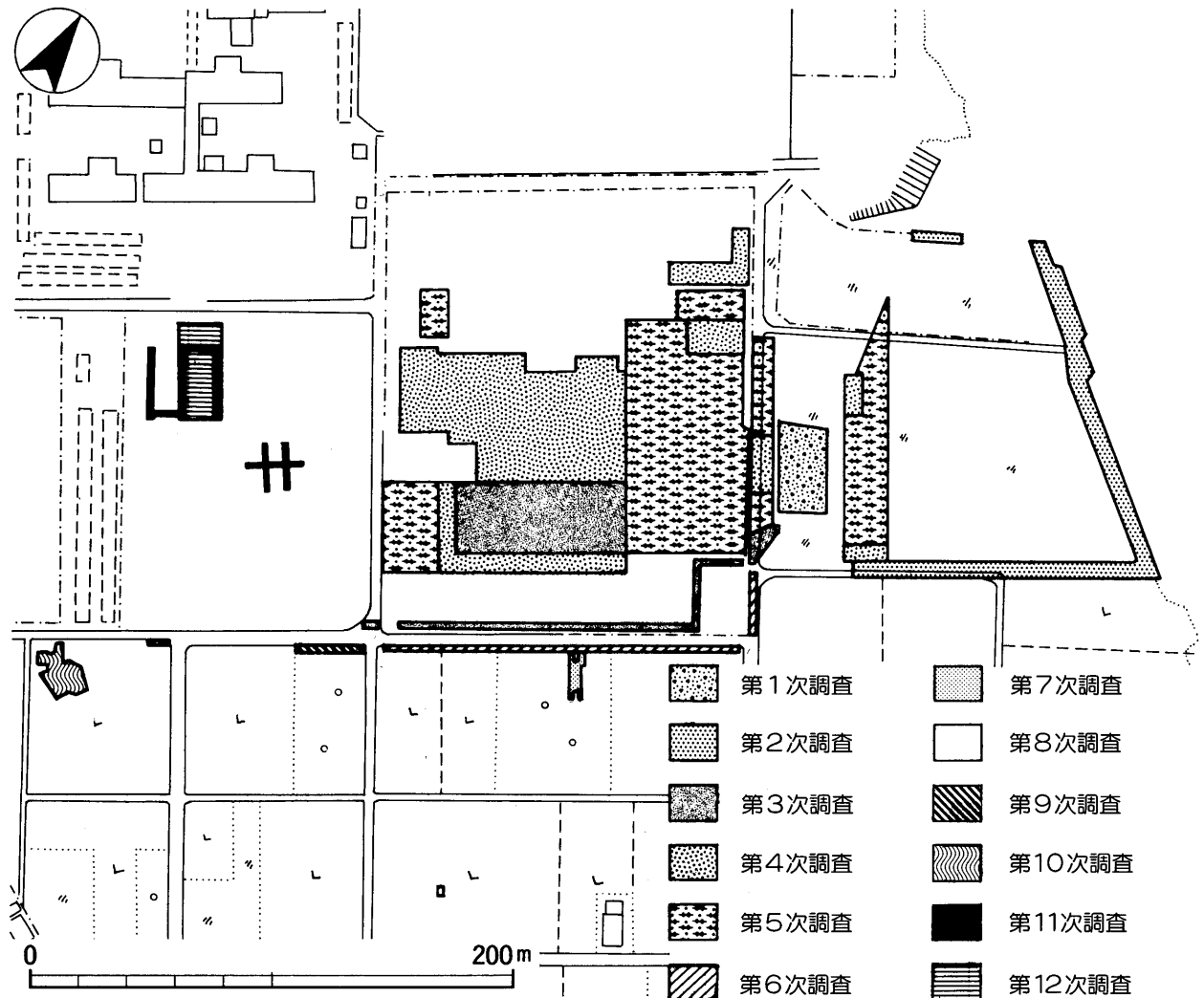
以下で各遺構について詳述するが、古墳の規模は周溝間の内法、方位は座標北を基準に計測している。

2 第11次調査

事業計画のうち、防災ヘリポート部分97.5㎡（対象面積500㎡）、備蓄倉庫部分171㎡（対象面積1,600㎡）の調査を行った。

防災ヘリポート部分には、T6～T8の3本のトレンチを設定した。T6・7は20m×1.5m、T8は25m×1.5mである。

基本的な層序は、上層からグラウンド造成土、旧帝国陸軍施設造成土、地山で、地山面もしくは遺構検出面の標高は約40.8m～41mである。調査の結果、



第2図 調査区位置図（S=1：3,000）

T 8で比較的新しい攪乱が見られたが、3本のトレンチ全てで古墳の周溝と思われる溝を検出した。範囲確認調査ということで、いずれもわずか1.5m幅という狭い範囲、かつ遺構の掘削は行っていないため、古墳の規模や形状等の詳細は不明である。遺構番号は付けていないが、2基以上はあると思われる。出土遺物には土師器片、須恵器片がある。

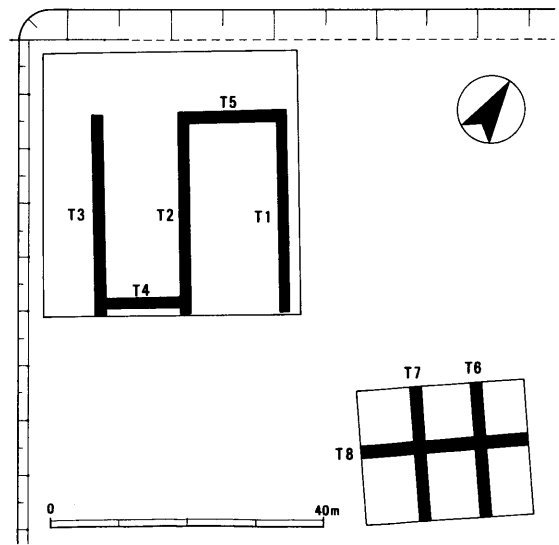
この部分については、全面遺跡の範囲内と判断し、協議を行った結果、現状保存が可能であるとして本調査は行わず、工事の際に立会いを行うこととした。

備蓄倉庫部分には、T 1～T 5の5本のトレンチを設定した。T 1・2・3は30m×1.5m、T 4は11m×1.5m、T 5は13m×1.5mである。

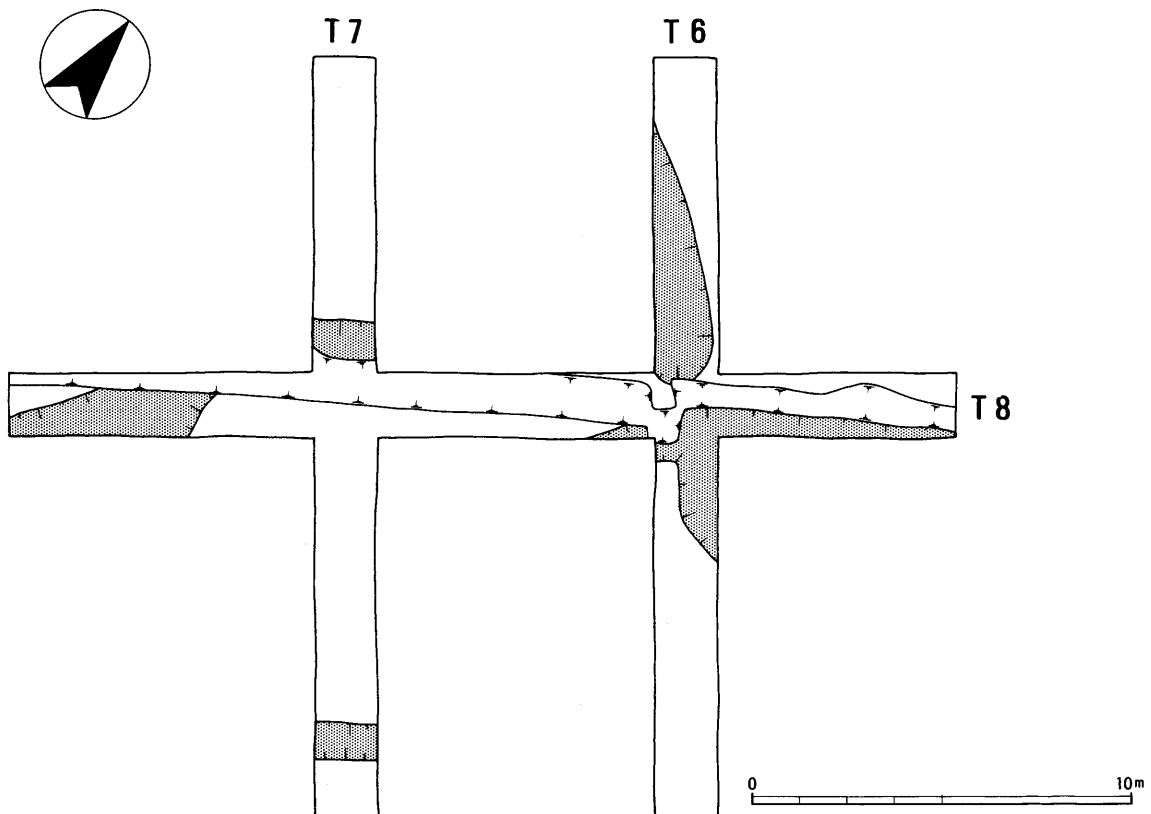
T 2～T 4では、浅い谷状の落ち込みを確認したのみで、遺構は発見できなかった。旧施設による削平が著しく、工事に差し支えないと判断した。しかし、T 1およびT 5では、古墳の周溝と考えられる溝を検出した。これより対象部分の北側約半分については遺跡内と判断し、協議を行った結果、現状保存が困難であるとして、本調査を行うことになった。

3 第12次調査

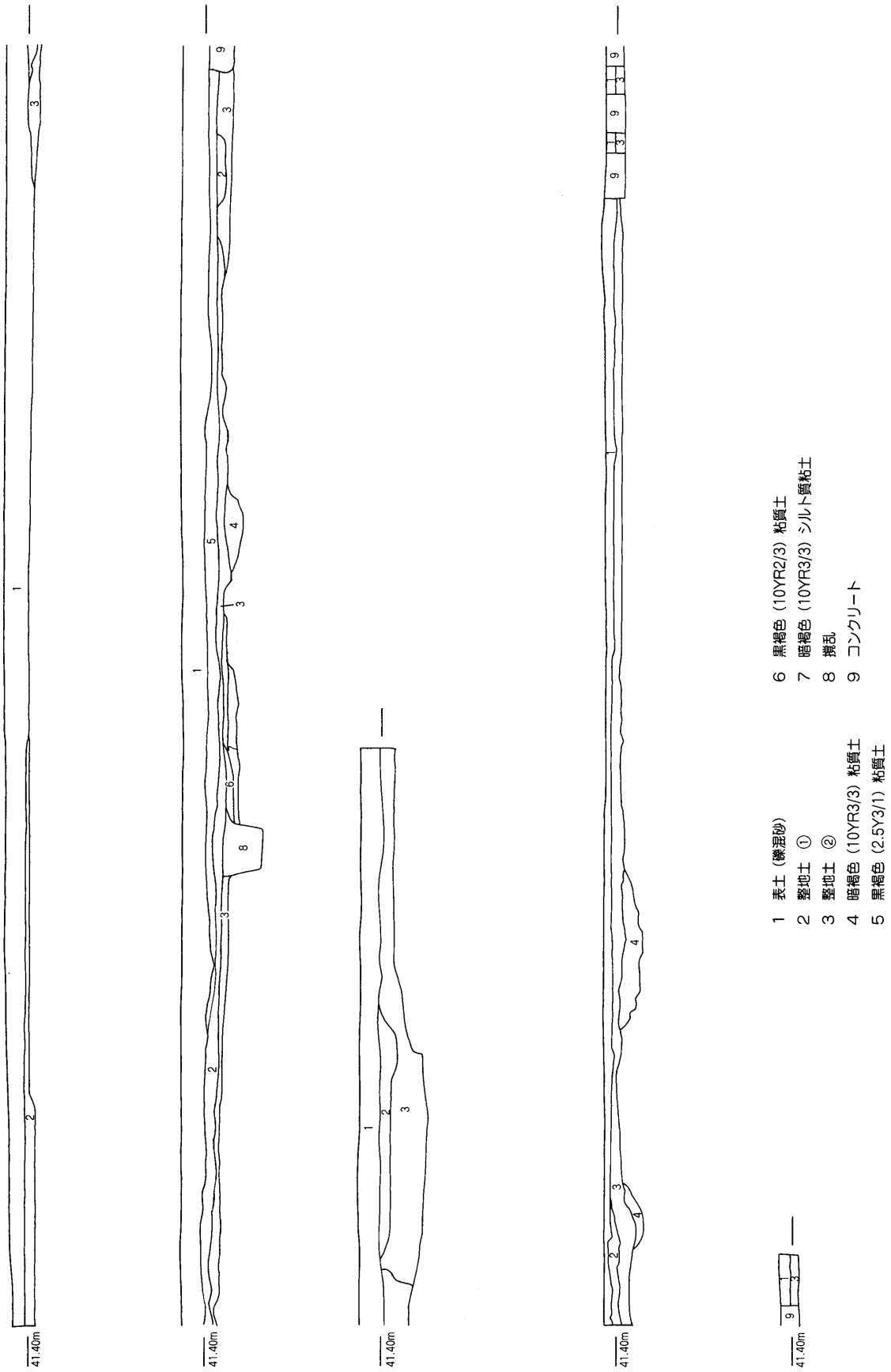
第11次調査の結果、本調査が必要と判断された備蓄倉庫部分の調査である。T 1・2・5を中心にした720㎡の調査を行った。以下調査結果を詳述する。



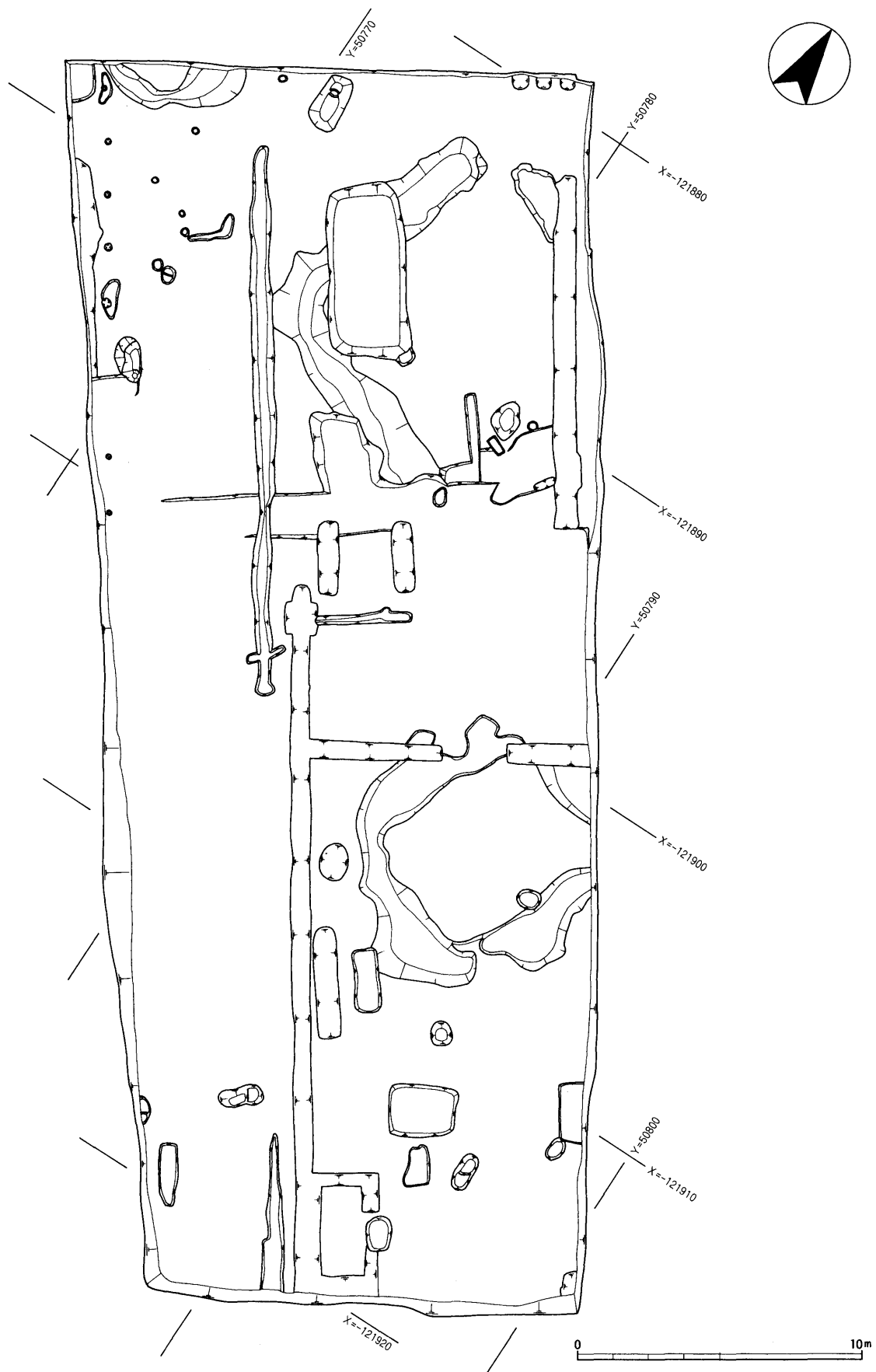
第3図 第11次調査トレンチ配置図 (S=1:1,000)



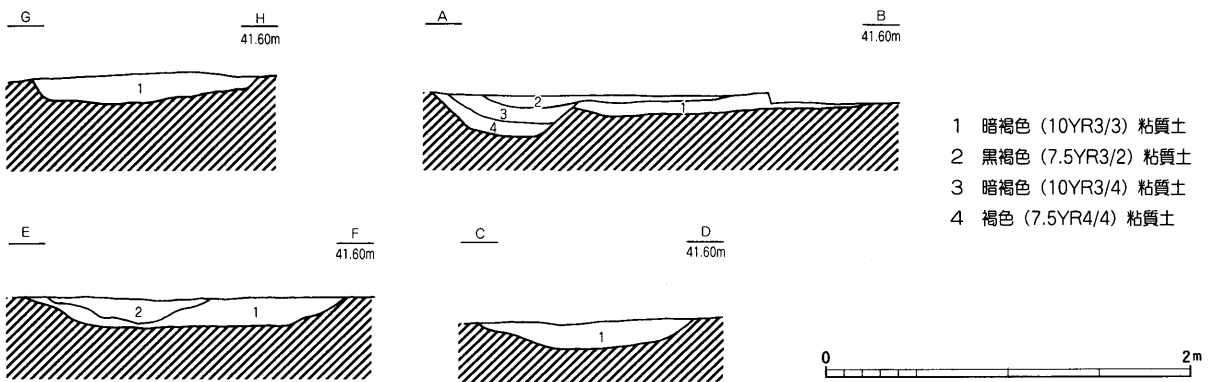
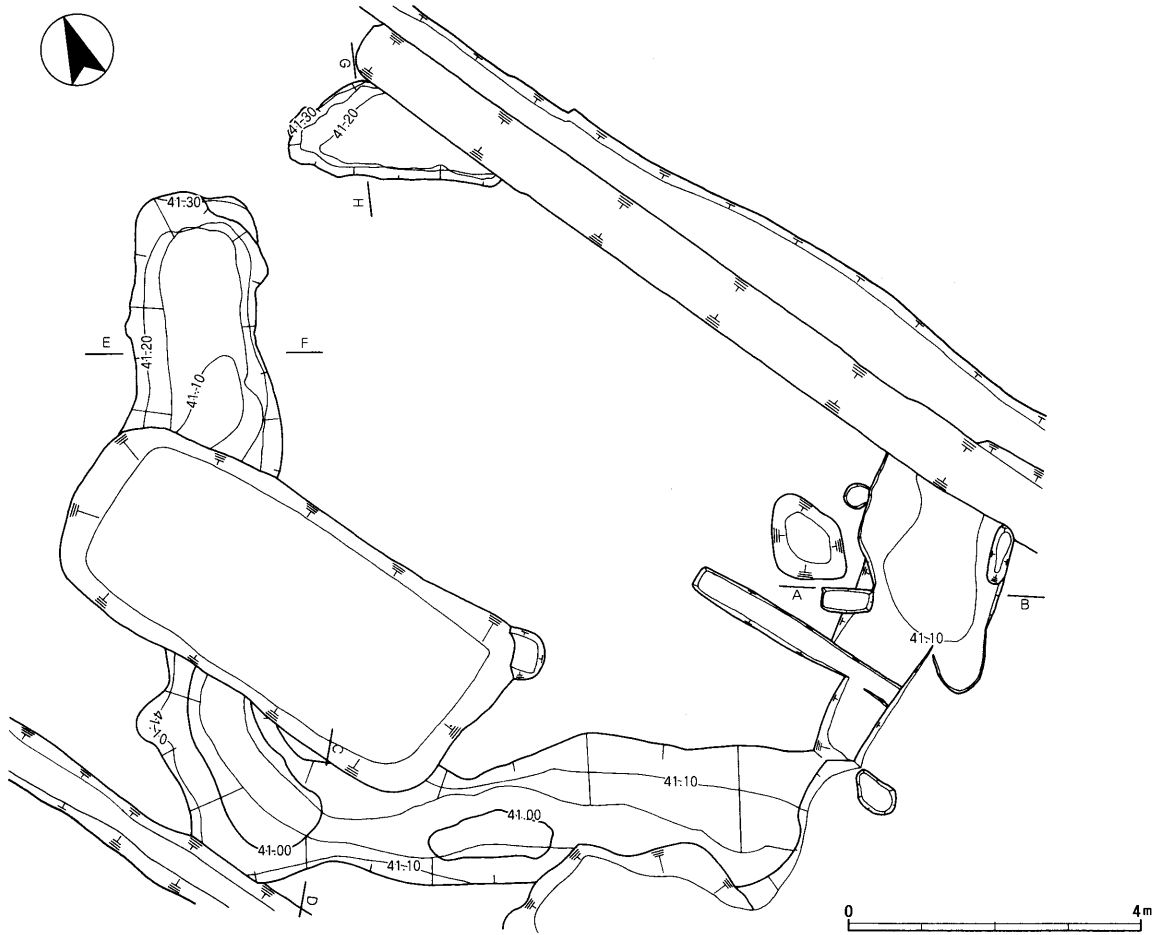
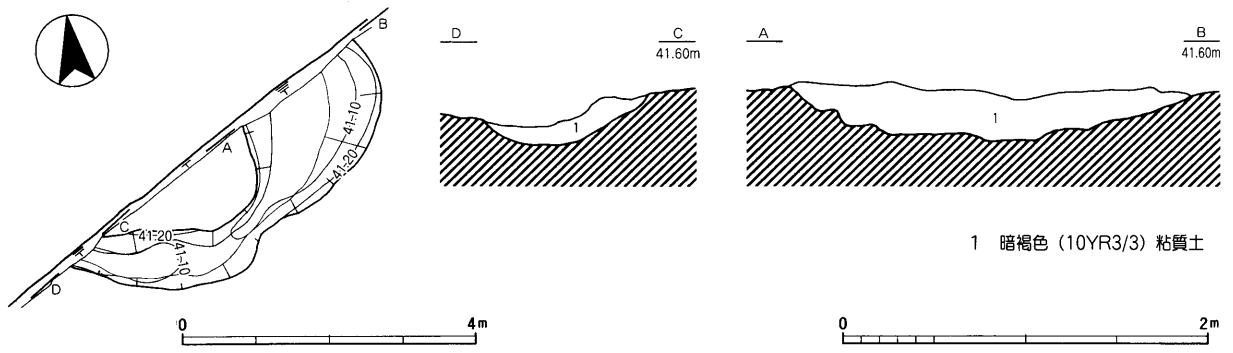
第4図 ヘリポート部分トレンチ平面略測図 (S=1:200)



第5図 第12次調査区北壁・西壁土層断面図 (S = 1 : 80)



第6図 第12次調査区遺構平面図 (S=1:200)



第7図 85号墳・86号墳平面図 (S=1:100) 及び土層断面図 (S=1:40)

(1) 基本的層序 (第5図)

基本的な層序は第1層：グラウンド造成土、第2層：旧帝国陸軍施設造成土、第3層：地山である。南東にいくにしたがって削平が著しく、調査区の南では遺構は全く残っていなかった。

(2) 古墳時代の遺構

① 85号墳 (第7図・図版2)

調査区北西端、表土直下で検出した。方墳の東溝と南溝の一部を確認したのみで、他の部分は調査区外である。規模は不明であるが、周溝幅は0.8m、深さは0.1m~0.3mを測る。遺物は、表土掘削中に周辺から土師器片が出土したにとどまる。時期は不明である。埋土が他の古墳と同様暗褐色粘質土であったため、古墳の周溝と判断した。

② 86号墳 (第7図・図版3)

調査区北東部で検出した。一辺約8mの方墳である。削平が著しい上に、旧帝国陸軍施設及び攪乱土坑によって破壊されており、完全に確認できた周溝はない。周溝の幅は約1.5mで、深さは0.1m~0.2mである。周溝はコーナー部分に向かって浅くなっ

ており、西溝と北溝の間のコーナー部分は検出できなかった。

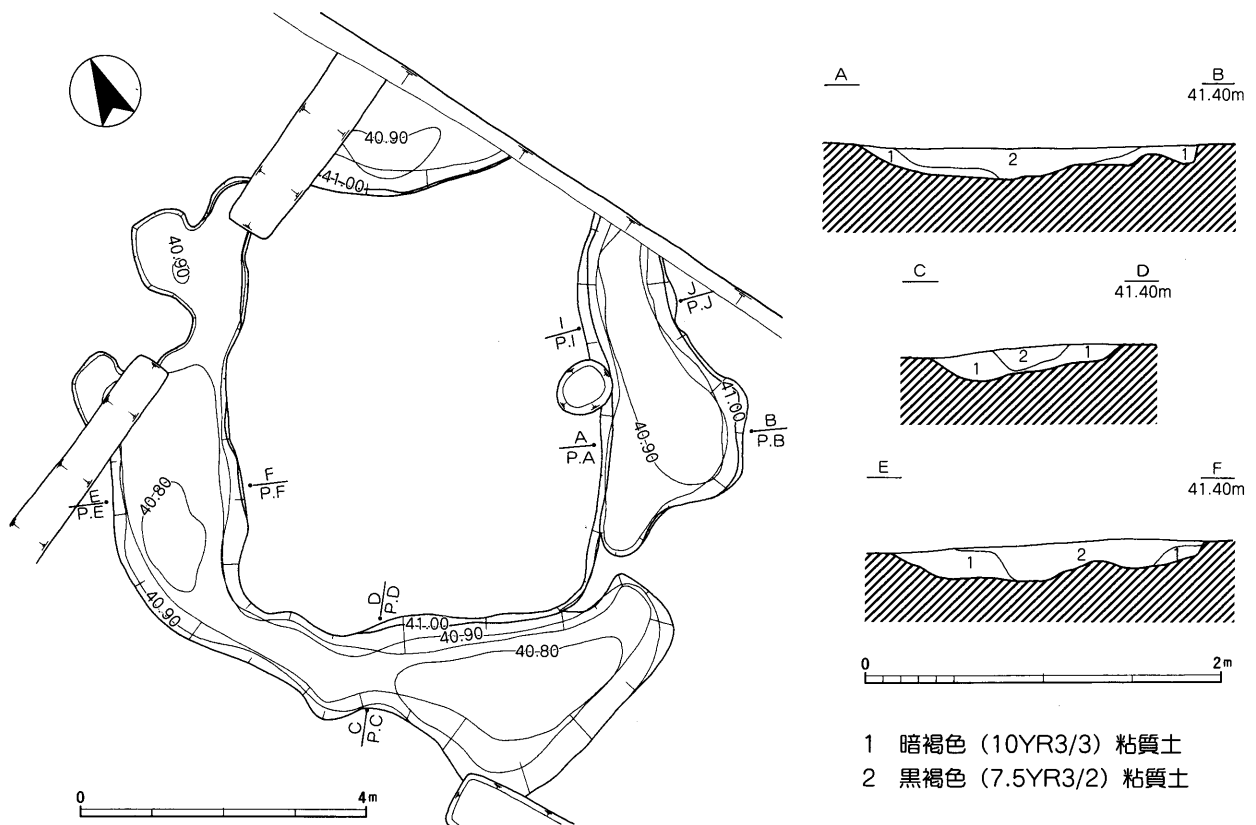
遺物は、南溝から土師質の細片が出土した。時期は不明である。

③ 87号墳 (第8図・図版3)

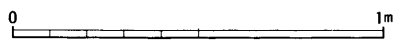
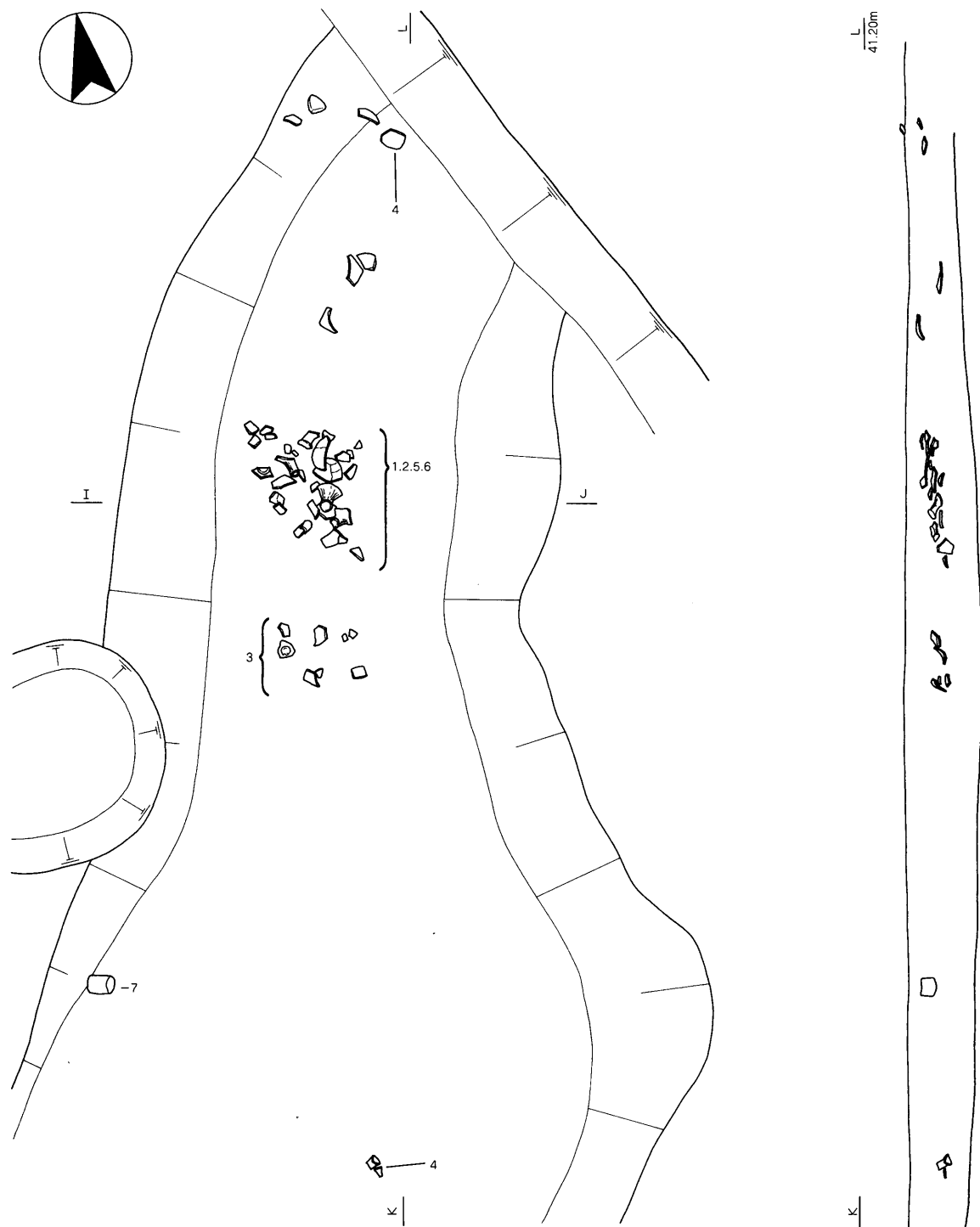
調査区北東部で検出した。南北約6m×東西約5mの方墳である。周溝は4辺とも確認したが、北溝と西溝は調査区外にのびている。周溝の内側のラインは直線的だが、外側は曲線的である。周溝の幅は1.2m~2.0mで、深さは0.1m~0.2mである。確認できたコーナー部分はいずれも幅が狭く、深さも浅い。南東部では途切れているような感さもある。

また、東溝の中央部から土師器の高杯(1~6)が6個体まとまって出土した。高杯はいずれも周溝底よりはやや浮いた位置で、細かく割れた状態で出土している。(第9図・図版4)。また、西溝から土師器高杯の脚部のみ(8・9)が2点出土した。その他、東溝から磨製石斧(7)が出土した。

(3) 古墳出土及び古墳時代の遺物 (第10図・図版5)



第8図 87号墳平面図 (S=1:100) 及び土層断面図 (S=1:40)



第9图 87号墳東溝遺物出土状況図 (S=1:20)

土師器高杯（1～6、8・9）

87号墳東溝及び西溝から出土した（東溝1～6、西溝8・9）。1・2は杯部が丸く、脚部はハの字状に開く。杯部外面及び脚部内外面にハケ調整が施され、杯部の口縁部にはヨコナデが施される。その他の高杯の脚部もハの字状に開いている。いずれの高杯もハケ調整は粗く、4の脚部にはハケ調整は見られない。

磨製石斧（7）

87号墳東溝から出土した。蛤刃の磨製石斧の刃部である。流れ込みと考えている。

土師器壺（10）

表土掘削中に85号墳周辺から出土した。体部内面・外面上部にハケメが施され、外面下部にはケズリが施される。口縁部が出土しなかったため時期は不明であるが、85号墳に関連する物と考えている。

須恵器壺（11）

後述する排水溝より出土した。口縁部はヨコナデされ、体部には刺突文がめぐる。短頸壺の口縁と思われるが、台部が付く可能性がある。

円筒埴輪（12～15）

表土及び攪乱土坑掘削中に出土した。14以外は土師質である。14はややひずみが見られるものの、円筒埴輪の底部と考えられる。外面にはナナメハケ、内面にはユビオサエの痕跡が残る。13・15は、外面にヨコハケが施されている。^①

（4）近代の遺構

旧帝国陸軍第1気象連隊（中部第131部隊、後555部隊）は、昭和17年に岐阜県各務原市から移駐し、主として気象学の教育を行っていた部隊である。しかし終戦後関係資料が焼却処分されたため、詳細が分からず「幻の部隊」ともいわれていた。近年、当遺跡の調査に伴って遺構が確認されており、その姿がわずかではあるが明らかになってきた。今回の調査でも遺構として建物の基礎や溝、土坑を確認している。

建物の基礎 コンクリート製である。調査区の東端で確認したのみで建物の全容は明らかでない。しかし、『一気連戦友会会誌』を参考に復元すると、気象通信器材庫と通信講堂の西端の基礎と考えられる。^②

排水溝 調査区のほぼ中央で南北方向に検出した幅0.6m程の溝である。0.6m四方のコンクリート製の枡が設置され、そこから南北方向に土管が埋設されている（図版4）。土管は素焼きの円形のもので、北から南へと流れるように組み合わせて設置されている。枡には上部に東西方向の土管も連結しており、東から流したものを枡で受け南へと流していたようである。なお、この溝と直交する形で溝が検出できた。当初排水溝の支線と考えたが、土管は発見できなかった。この溝の性格は不明である。

土坑 大小様々な大きさのものを検出した。全てを掘削したわけではなく、当然気象連隊以後のものも含まれる。その内、長辺2m×短辺1mの長方形の土坑は、ちょうど人一人が隠れることができるほどの大きさで、待避壕の可能性があると考えている。

（5）近代の遺物（第10図・図版5）

遺構検出中及び昭和時代の攪乱を掘削中に軍用食器・瓦・土管等が出土した。

軍用食器（16～20）

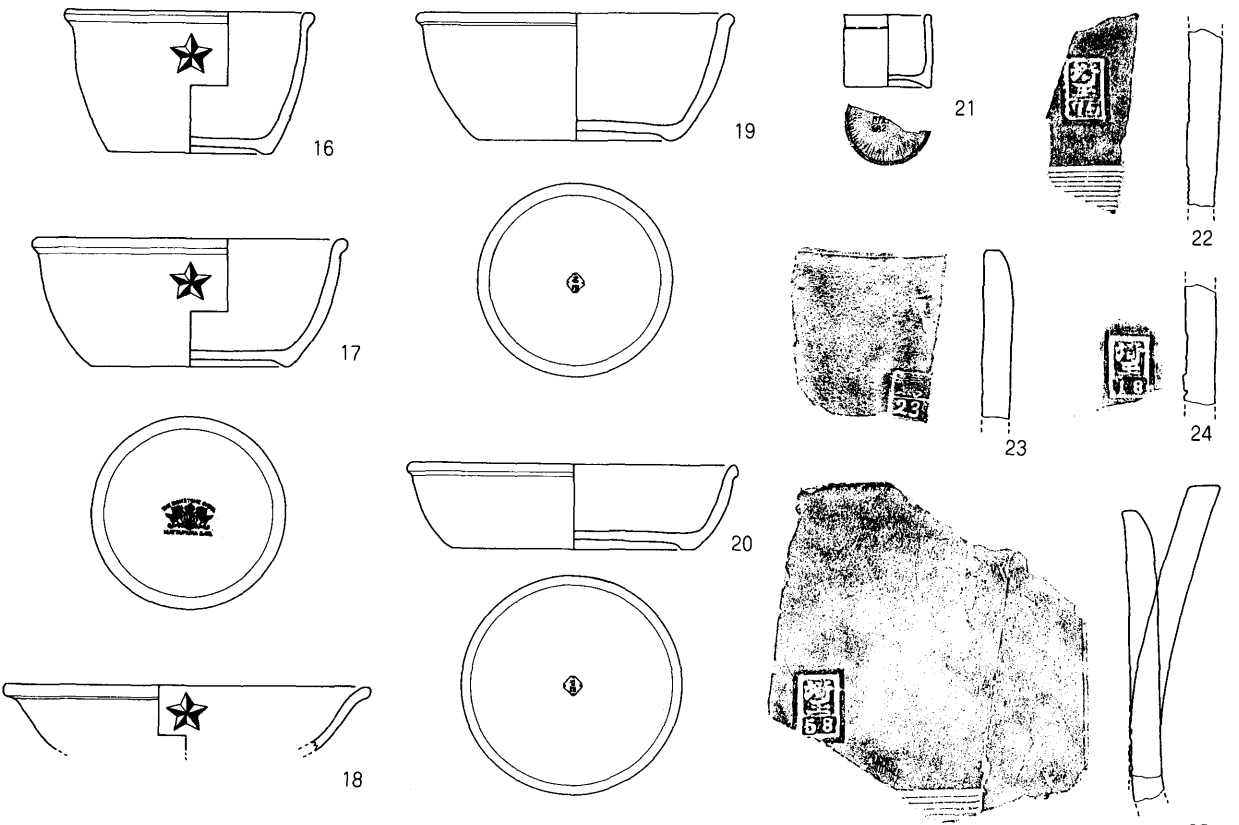
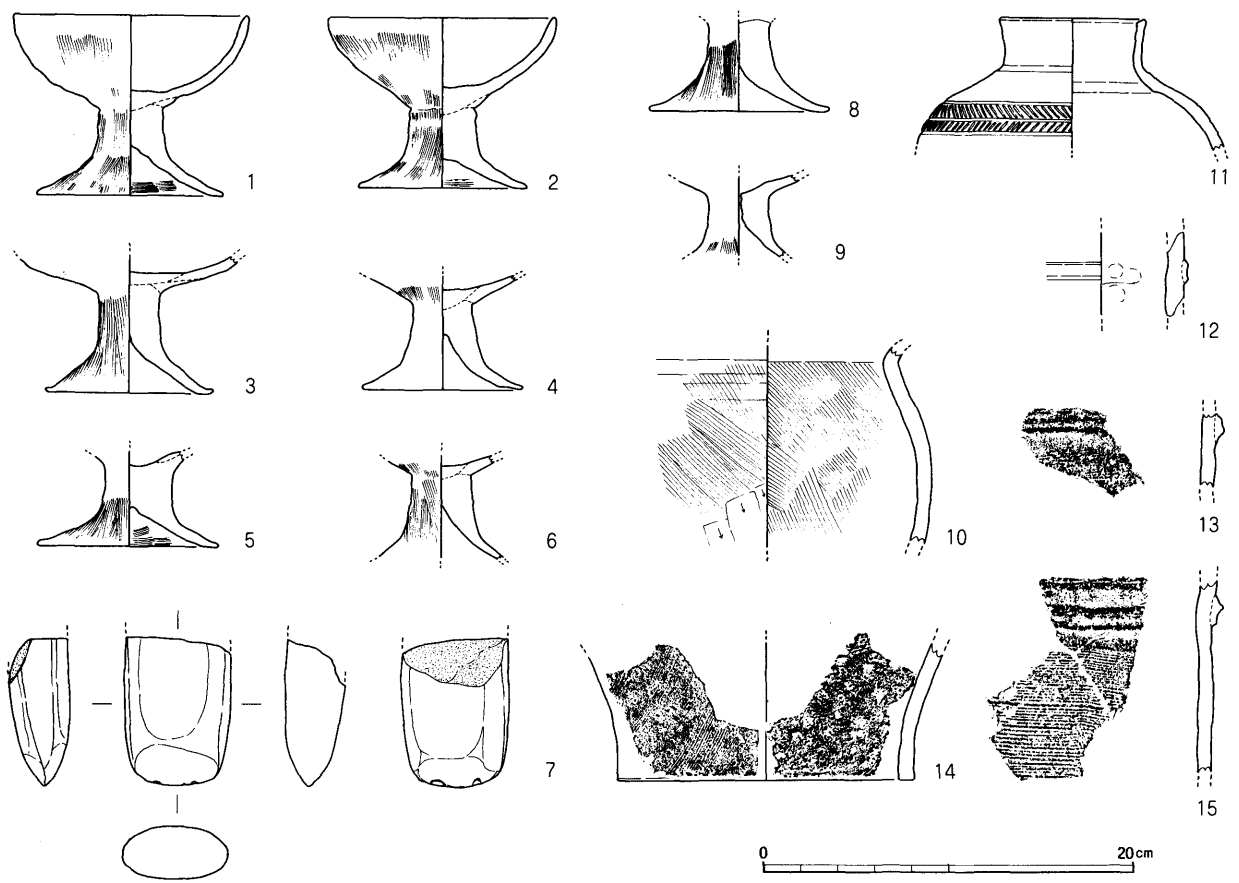
陶磁器製の椀と皿である。いずれも口縁は玉縁状で、大きさには3種類がある。口縁部内外面いずれかに旧帝国陸軍章である星印が青色と緑色の2種類で染め付けされている。青色の物は底部外面に「名陶」、緑色の物も底部外面に「THE IRONS TONE CHINA/MATSUMURA & ■■■」とそれぞれ同色で染め付けされている。「名陶」は現（株）鳴海製陶所の前身である名古屋製陶のことである。もう一方の「MATSUMURA」は、確認できていないが、松村硬質陶器合資会社の可能性がある。松村硬質陶器合資会社は松村八次郎氏が明治29年に名古屋で操業を開始した製作所で、戦中も操業し軍用食器も製作していたという。^③

陶製容器（21）

やや上げ底の底部外面に「岐682」の刻印が施される。化粧容器として使用された可能性がある。「岐682」は当時の統制の結果、商工省が生産者に対してつけた所謂統制番号で、この「岐682」は岐阜県妻木町陶磁器工業組合に所属する仙石周太郎氏が製作したものに付けられた番号である。^④

瓦（22～25）

平瓦の凸面に2.7cm×3.8cmの刻印が施されている。



第10図 出土遺物実測図 (S=1:4)

刻印には「群馬23」「埼玉58」「埼玉61」「埼玉75」「埼玉18」が確認できた。先年の調査でも同様の瓦が出土しているが、この刻印の意味は不明である。

[註]

- ① 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻2号、日本考古学会、1978
- ② 気象連隊兵舎は昭和17年に建設された後、何度か建替えが行われたようである。現在4種類の図面が存在しているが、それぞれの段階の建物を示しているのかがはっきりしない。今回参考にしたのは、「昭和十八年六月十日 李王垣殿下巡視の経路と当時の建物配置図」と称する図面である。(『一気連戦友会誌』一気連戦友会編集委員会編集、1979)。

- ③ 旧陸軍の軍用食器は全国各地の戦争遺跡から出土しているが、報告されている物はいずれも「名陶」製の物であり、「MATSUMURA」製の物は管見にふれなかった。観察する限り、「MATSUMURA」製の物は「名陶」製の物に比べ、粗悪な物である。戦時下の物資の欠乏の結果という可能性もあるが、英語が使用されていることから戦時下の統制が強くなってから作られた物とは考えにくい。使用者の階級差による使い分けの可能性もある。(また、松村硬質陶器合資会社については、服部文孝氏のご教示、及び『名古屋市史 産業編』名古屋市役所、1914による)。
- ④ 伊藤厚史氏のご教示による。また、同様の製品は麻布台1丁目郵政省飯倉分館構内遺跡でも出土している。(天内克史「統制経済下における陶磁器生産の様相」『村上徹君追悼論文集』村上徹君追悼論文集編集委員会、1988)

号墳	墳形	東西規模 (m)	南北規模 (m)	周溝幅 (m)	周溝深 (m)	方位 (NE)	出土土器	備考
85	方墳	不明	不明	0.8~2.0	0.1~0.3	9°		
86	方墳	8.2	8.0	1.3~2.0	0.1~0.2	20°	土師器細片	
87	方墳	8.0	6.0	1.0~2.5	0.1~0.2	25°	土師器高杯	

第2表 古墳一覧表

No.	登録番号	器種	遺構出土位置	口径 cm	器高 cm	その他 cm	調整技法の特徴	胎土	構成	色調	残存	
1	006-01	土師器高杯	87号墳東溝	12.6	9.8	底径 10.0	外：ハケ、ナデ 内：ハケ	密 1mmの小石・砂粒含む	軟	淡黄色2.5Y8/4	1/2	
2	006-02	土師器高杯	87号墳東溝	12.2	9.3	底径 9.0	外：ハケ、ナデ 内：ハケ	密 2mmの小石・砂粒含む	軟	淡黄褐色10YR8/3	1/3	
3	005-04	土師器高杯	87号墳東溝		(7.5)	底径 9.0	外：ハケ	粗 5mmの小石・砂粒含む	軟	淡黄色2.5Y8/3		
4	005-01	土師器高杯	87号墳東溝		(6.5)	底径 8.6		やや粗 1mmの小石・砂粒含む	軟	淡黄色2.5Y8/4		
5	005-05	土師器高杯	87号墳東溝		(5.2)	底径 9.6	外：ハケ 内：ハケ	やや粗	軟	淡黄褐色10YR8/3		
6	005-06	土師器高杯	87号墳東溝		(5.7)		外：ハケ	粗 5mmの小石・砂粒含む	軟	淡黄色2.5Y8/3		
7	002-01	石器磨製石斧	87号墳東溝	長さ (8.0)	幅 5.6	厚み 3.0						
8	005-02	土師器高杯	87号墳西溝		(4.8)	底径 9.6	外：ハケ	やや粗 1mmの小石・砂粒含む	並	外・内：にぶい橙色 7.5YR7/4, 6/4		
9	005-03	土師器高杯	87号墳西溝		(4.5)		外：ハケ	やや粗	軟	淡黄褐色10YR8/4		
10	001-01	土師器壺	表土				内：ハケ・ケズリ 外：ハケ	やや粗 4mmの小石・砂粒含む	並	外・内：にぶい橙色 7.5YR7/4, 6/4		
11	007-01	須恵器短壺	排水溝	7.8	(7.0)		ロクロナデ	良	並	灰色N5/		
12	001-03	円筒埴輪	攪乱土杭				内：ナデ 外：ナデ	やや粗 1mmの小石・砂粒含む	並	外：橙色5YR7/6		
13	001-04	円筒埴輪	包含層				内：ナデ 外：ヨコハケ	やや粗 3.5mm~の小石・砂粒含む	並	外：淡黄褐色10YR8/4		
14	002-02	円筒埴輪	包含層				内：オサエ・ナデ 外：ナメハケ	やや粗 5mmの小石・砂粒含む	良	外：にぶい黄褐色 10YR6/3		
15	001-05	円筒埴輪	排水溝				内：オサエ・ナデ 外：ヨコハケ	やや粗 6mmの小石・砂粒含む	並	内・外：橙色 5YR6/6		
16	008-01	陶磁器碗	攪乱土杭	13.4	7.7	底径 8.8			並	白色	1/2	体部外面：星印(緑) 底部外面：「THE IRONSTONE CHINA MATSUMURA & ■」刻印
17	008-03	陶磁器碗	攪乱土杭	17.0	7.0	底径 10.6			並	白色	1/2	体部外面：星印(緑) 底部外面：「THE IRONSTONE CHINA MATSUMURA & ■」刻印
18	008-04	陶磁器碗	攪乱土杭	17.2	6.9	底径 11.0		密	良	白色	1/2	底部外面：名陶(青)
19	008-02	陶磁器皿	攪乱土杭	17.4	4.6	底径 12.8		密	良	白色	1/2	底部外面：名陶(青)
20	009-01	陶磁器皿	攪乱土杭	19.8	(3.5)			やや粗	並	白色		底部外面：星印(緑)
21	004-02	陶器容器	攪乱土杭	4.7	4.0	4.7		密	並	白色		底部外面：「岐682」印
22	003-03	瓦平瓦	攪乱土杭		厚み 2.0			やや密	良	外：灰色7.5Y4/1~N4 内：灰色N6~暗灰色N3/		「埼玉58」刻印
23	004-01	瓦平瓦	攪乱土杭		厚み 1.6			やや密	良	外：灰色5Y4/1 内：灰色N4/		「埼玉18」刻印
24	003-02	瓦平瓦	攪乱土杭		厚み 1.6			やや密	良	灰色N4/		「埼玉75」刻印
25	003-01	瓦平瓦	攪乱土杭		厚み 1.6			やや密	良	灰色7.5Y5/1		「群馬23」刻印

第3表 出土遺物観察表

Ⅳ 結 語

・石薬師東古墳群について

第12次調査の調査区は過去の調査区よりも削平が著しく、検出できた周溝も非常に浅いものだった。土器も85・86号墳では土師質の小片が、87号墳では土師器高杯が出土したのみである。このため、詳細な時期の決定ができない。しかし、古墳の規模・方位がほぼ同じであることや、87号墳出土の土師器を見る限り、過去の調査で発見された古墳と同時期の5世紀後半から6世紀前半に属すると思われる。また、85・86・87号墳全ての古墳において共通している事として、周溝のコーナー部分が浅い事があげられる。この特徴は過去の調査で発見された古墳にも当てはまる。こうした点からも、各古墳は同じ集団に造営されたものであろう。

石薬師東古墳群は過去に鈴鹿市教育委員会・当埋蔵文化財センターの調査で合わせて59基の古墳が発見されている。今回の第12次調査でさらに3基の方墳が発見でき、第11次調査の結果では2基以上の古墳の存在が推定できることから、ここには64基以上の古墳が存在していたことになる。過去の調査から当古墳群は方墳の多い古墳群であり、数少ない円墳は遺跡の東に集中していることが分かっている。今回の調査結果もそれを裏付ける結果となった。

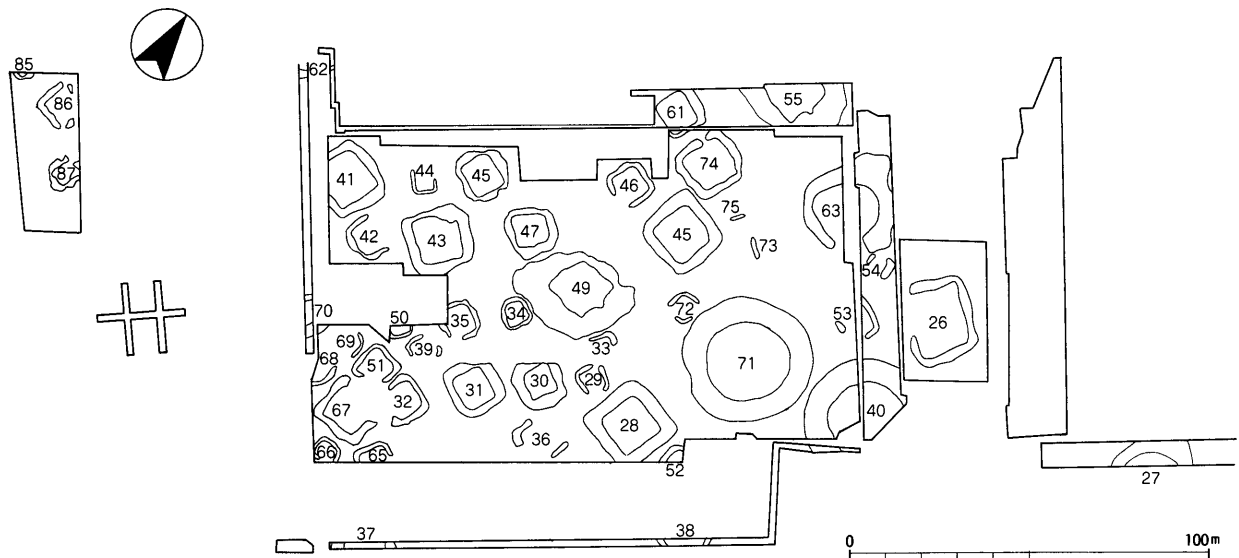
・87号墳出土の遺物について

今回の調査では出土した遺物が非常に少なく、古墳時代の土器は総量でもコンテナボックスにしてわずか3箱にすぎない。唯一古墳周溝内から出土した87号墳の事例について若干の検討をする。

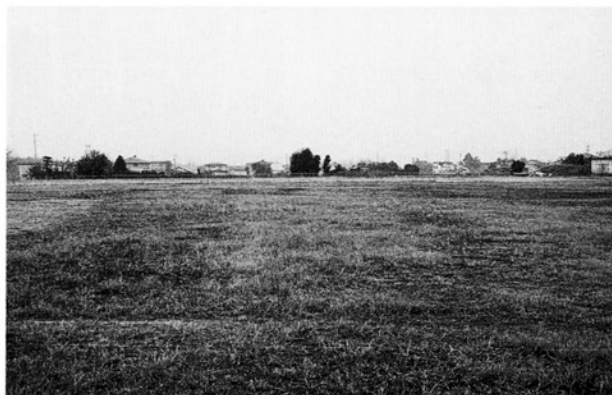
87号墳からは、西溝から土師器高杯の脚部が2個体、東溝から土師器高杯6個体と磨製石斧が出土している。(この内、磨製石斧は流れ込みと判断している)。当古墳群において高杯6個体という事例は、39号墳で確認されているが、これは須恵器高杯の例であり、土師器のみという例は現在までのところ発見されていない。6個体という点や使用不可能な状態での出土という点は、いわゆる「六文銭」祭式との類似が考えられる。「六文銭」祭式は、群集墳に見られる祭祀形態で、須恵器を用い、杯以外の土器は使用できない状態で出土する事が知られている。「六文銭」祭式が須恵器のみに限るものであるのか一考を要する事例と言えよう。

【参考文献】

- ・服部芳人「鈴鹿川流域の群集墳の一例 石薬師東古墳群の概要」『Mie history』vol. 10 三重歴史文化研究会、1999
- ・服部芳人「古墳周溝内における遺物出土状況について 石薬師東古墳群の例から」『研究紀要』第8号 三重県埋蔵文化財センター、1999
- ・楠元哲夫「六文銭 古墳における須恵器祭式成立の意義とその背景」『考古学と生活文化』森浩一編、1992



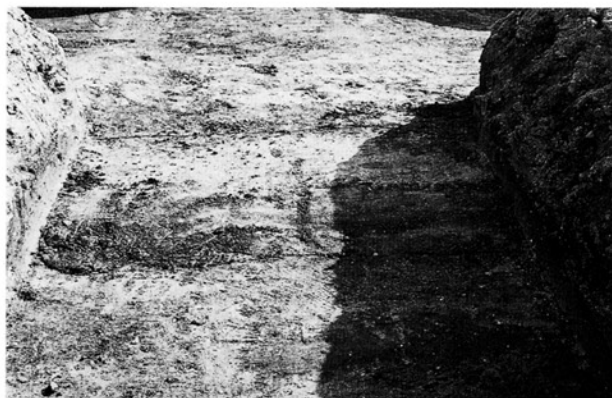
第11図 石薬師東古墳群 古墳配置図 (S=1:2000) (但し、県調査分のみ)



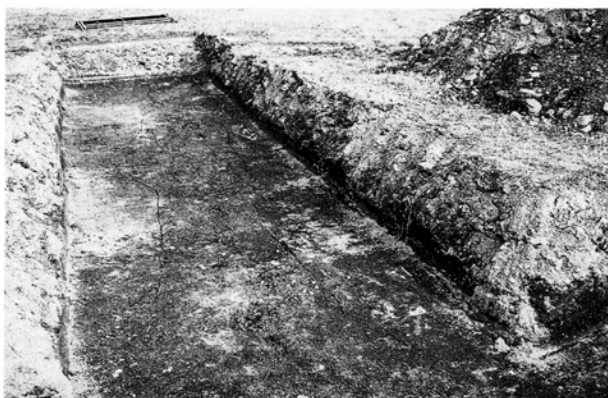
第11次調査前風景



T 6 周溝 (北から)



T 7 周溝 (南から)



T 8 周溝 (西から)



T 7 南側 (北から)



T 8 全景 (東から)



第12次調査調査区全景（南から）



85号墳（北から）



86号墳（東から）



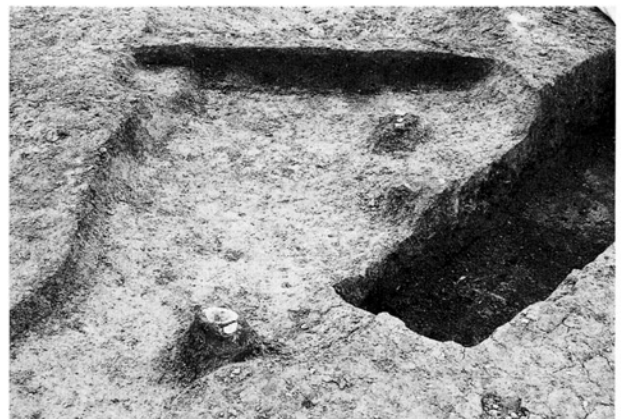
87号墳（西から）



87号墳東溝遺物出土状況



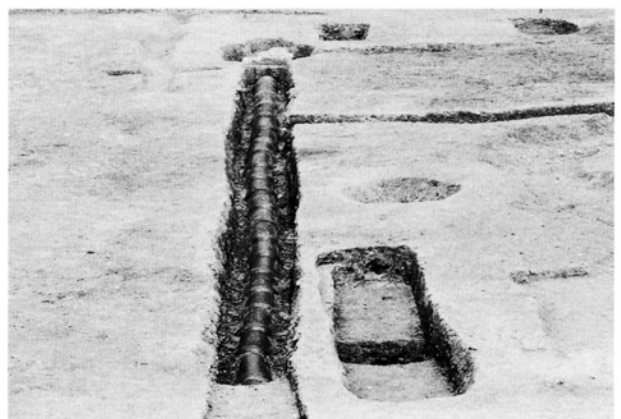
87号墳東溝磨製石斧出土状況



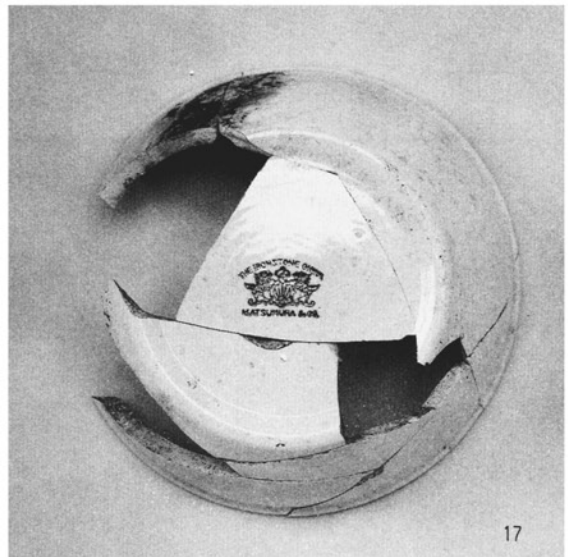
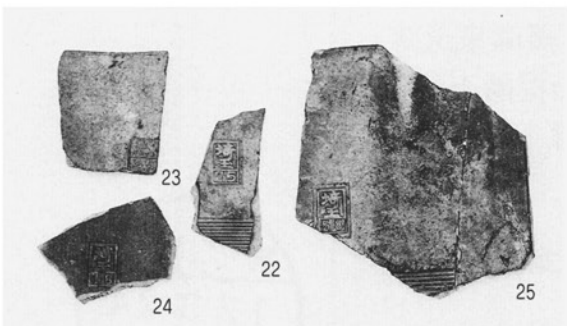
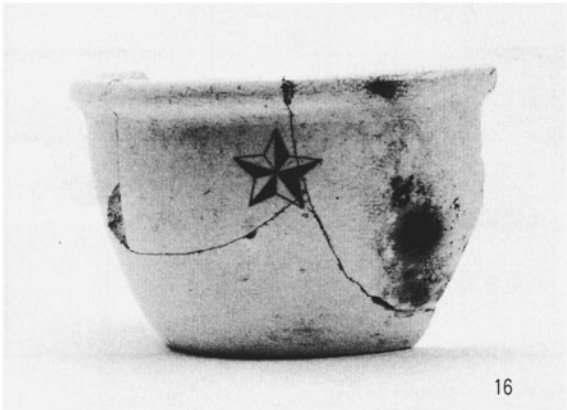
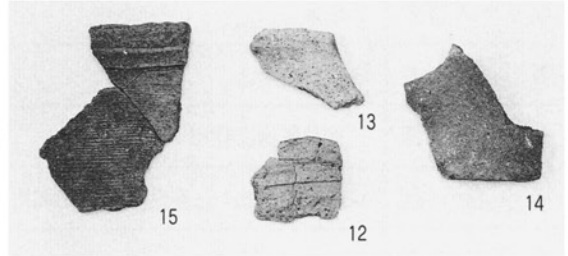
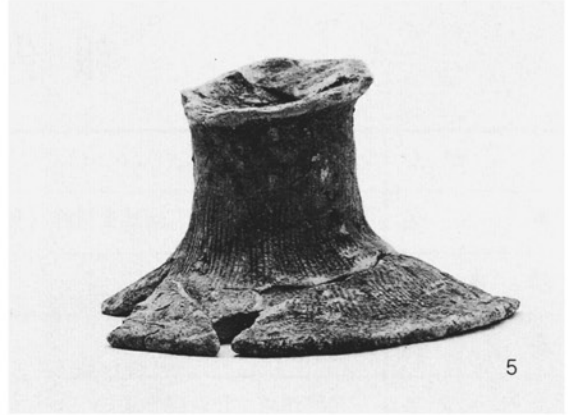
87号墳西溝遺物出土状況



作業風景



旧帝国陸軍排水溝



出土遺物

報告書抄録

ふりがな	いしやくしみがしこふんぐん・いしやくしみがしいせき(だいじゅういちじ・だいじゅうにじ)はくつちようさほうこく							
書名	石薬師東古墳群・石薬師東遺跡(第11次・第12次)発掘調査報告							
副書名								
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	200							
著者名	角正 淳子							
編集機関	三重県埋蔵文化センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 Tel0596(52)1732							
発行年月日	2000年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いしやくしみがしこふんぐん 石薬師東古墳群	みえけんすずかし 三重県鈴鹿市 いしやくしちゆうあさでいひがし 石薬師町字寺東	24207	1272 (85号墳)	34° 54' 10"	136° 33' 30"	19990125)	268.5m ² (第11次)	三重県防災拠点施設整備事業に伴う 事前調査
			1273 (86号墳)			19990129		
			1274 (87号墳)			19990419)		
いしやくしんがしこふんぐん 石薬師東遺跡			727			19990630		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
石薬師東古墳群	古墳	古墳時代	古墳周溝(方墳3基)		土師器高杯			
石薬師遺跡		近代	旧帝国陸軍第1気象連隊 兵舎基礎・排水溝・待避壕		陸軍食器・瓦			

平成12(2000)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年10月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告200
石薬師東古墳群・石薬師東遺跡
(第11次・第12次)発掘調査報告
2000年3月

編集 三重県埋蔵文化財センター
発行
印刷 文化印刷有限公司